

富岡の桜

未来へのバトン

大切なおだがいさまの心

◆この題字名にした理由 富岡町のシンボル「夜の森の桜」。原発事故後、夜の森の桜はバリケードで隔てられました。題字は、それでも春になるとけなげに咲く桜に、愛おしさを感じている町民の心を表しました。取材班5人が話し合っ、て決めました。

富岡町3・11を語る会

青木淑子代表

2023(令和5)年春の全地区避難指示解除を目指している富岡町で、青木淑子さん(73)はNPO法人「富岡町3・11を語る会」の代表を務めています。震災語り部の青木さんは「放射線の被害は目に見えませんが、それだけに原発事故被害を言葉にする役目が大切」と言います。東日本大震災・原子力災害伝承館で青木さんの口演を聞き、震災を伝える活動を取材しました。

富岡町と川内村の住民は、郡山市のビッグパレットふくしまに避難しました。ピーク時には3000人に達し、広いスペースが人で埋まり、ストレスは極限に達しました。同市に住んでいた青木さんは毎日、避難所支援に通ったそうです。震災前、青木さんは富岡高

の教師で、町になじみがあつたのです。おだがいさまセンターで、青木さんは新聞を作り、目が悪くて新聞が読めない人にはミニFMで情報を伝えました。

震災後2年が経ち、自分たちの町で何が起こったのか伝えようと、センターのコミュニティの中から語り部のグループが生まれました。

語り部の口演では、富岡町から川内村に向かう

伝承館前に立つ青木さん(左)と取材班



一本道が避難の車で大渋滞している写真が紹介されます。30分の道が3時間もかかりました。「すぐ帰れる」と思っていた町民の横には、防護マスク姿の警察官が交通整理をしていました。あとで情報の格差を痛感したそうです。また、母牛に死なれた子牛が、震災1ヵ月後も生き残っていた話もあります。長年牛を飼っていた人によると、自分の子以外に乳を飲ませることはないそうです。震災の極限状態で、牛も助け合ったのでしようか。

青木さんは17年4月、富岡町に移住しました。町民と同じように町を愛しているからだそうです。「人生を根こそぎ変えた原発事故被害」を語るのは「被災者の責務」と訴えます。「町を創るのも壊すのも人。人に寄り添い、町のコミュニティを再生したい」と将来の夢を話してくれました。(小林幸乃、渡邊莉菜)



伝承館内を見学する参加者

震災語り継ぐ



富岡町の思いと語り部活動について話す青木さん

青木さんインタビュー

次世代の伝承者育てたい

私たち取材班は青木さんに活動を通しての思いを聞きました。

Q、これからの課題は何だと思いますか。

A、若い世代の語り人(語り部)育成です。現在活動している人の大半は高齢者。震災を語る語り人がいなくなってしまう。表現力育成イベントや若者向け教室に力を入れています。

Q、語り部で学んだこ

とは。

A、人に伝えることは難しい。話し方の勉強になります。語り人の話を聞く人に合わせて、話す内容を変え、正しく伝えられるように気を付けています。

Q、富岡町の変化はどう感じますか。

A、町は今、3種類の住民がいます。復興関連で住んでいる人、旧住民、そして私のような移住し

てきた新住民。震災以前の町と違います。若者の学校と多様な人が話せる場所がほしい。特に学校は地域をつなぐ大切な存在と感じます。

Q、どこまでいけば、町の復興といえますか。

A、確かに、施設や道路は新しくなり、目に見える復興は進んでいます。一方で、いろんな立場の住民同士が違和感なく住め、分かち合えるよ

うになれば、内面まで復興したと言えるのでは。

Q、震災のことを話していて辛いのですか。

A、震災当時、郡山にいた私は原発事故避難を経験していません。経験した語り人によると、思い出してしまうと辛くなることがあるそうです。聴衆が共感してくれると、気持ちに通い心が整理されると言います。コロナ以降、オンラインが増えましたが、気持ちが大より通うライブの場は大事です。(富田紗那、中島空音、八木沼杏菜)

私たちがつくりました

今度は私たちが伝える

今回初めて語り部の方の話を聞きました。今まで小学校、中学校でも震災のことを聞いたり話したりする時間はありませ

語り継ぐ大切さ

初めて語り人口演を聞き、もう薄れかけていた当時の記憶を思い出しました。被害が目に見えない災害である原発事故は

故郷を言葉で繋ぎたい

私は語り部の青木さんから、富岡町での震災の話を聞きました。様々な人の体験の話から、多くの人の人生を変えた出来

原発まだわからない

私は震災当時、まだ2歳でした。だから、原発で水素爆発が起きたことは分かりませんが、どのよう

忘れないで伝えよう

私が生まれて間もないころ、震災が起きました。青木さんは「赤ちゃんを育てていた親が一番大変だ」と話していて、きつ

佐野 宏翔 (大学生・20歳)



ジャーナリストスクールの卒業生として、取材や記事づくりの手伝いをさせていただきました。

小学生から高校生までが集まって一つの記事を作り上げるということは他のイベントでは体験することが難しいことです。以前このイベントに参加した自分も改めて、新聞を作る難しさ、チームとして協力することの大切さを学ばせてもらいました。また、取材の際に重要な「疑問に思ったことは何でも聞く」ことは取材だけでなく、情報が氾濫している世の中で、今後の人生に生かせるものであると感じました。(佐野 宏翔)

OB・OGからエール

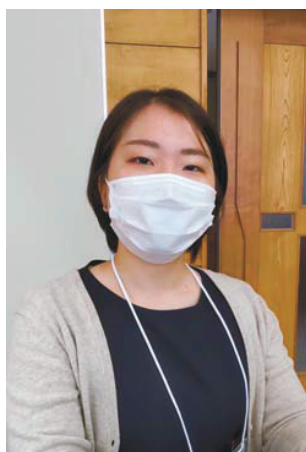
踏み込む勇気／伝える楽しさ

浜松さんから紙面作成のレクチャーを受ける記者



「難しく伝える」ことはとても難しいです。ジャーナリストスクールOGとして参加するのは2回目になりますが、誰に何を伝えるために取材をするのか、どうやって自分の言葉で記事にしていくなか、子どもたちにその楽しさ・考える楽しさを感じてもらおう手助けができれば嬉しいです。(浜松郁美)

浜松 郁美 (会社員・23歳)



先日首都圏近郊で大きな地震がありました。それを機に震災当時のことを教えて欲しい、と言われることが増えました。11年前の当時確かに自分で経験したことであり、人に事実を「正



青木さんに語り部の活動について質問する記者